

## マタイの福音書 第5章 チャック・スミス

テープ # C2177

今夜は山上の垂訓です。何と素晴らしい聖書箇所でしょう。マタイの福音書第5章です。

**この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。(5:1-2)**

まず初めに気づくのは、この山上での説教が万人に向けられたものではないということです。山上の垂訓は群衆に向けられたものではありませんでした。

イエスはここで群衆に向かって語りかけてはおらず、弟子たちに語られています。イエス・キリストの弟子でなければ、山上の垂訓は理解するのに極めて難しいものとなります。それが実際にはその人たちには適用しないからです。

それは、イエスの弟子たちにのみ適用するものです。それで、イエスは群衆を見て、群衆から離れられました。イエスは山に登られました。そして弟子たちがみもとに来ると、口を開いて彼らに教えられました。

イエスは座っておられました。これは教師の取る姿勢です。その当時は、教師が座って、学生らが立っていました。

どういうわけか、それ以来、物事はすっかり歪んでしまいました。当時、教師たちが立ったのは、布告する者として真理を宣言したりする場合でした。

ヨハネの福音書第7章で、神殿の丘にいたイエスが、立って、大声で「だれでも渴いているなら」と言われたのは、輝かしい真理をすべての人々に布告しているのです。真理を宣べ伝えたり、真理を説くためには、彼らは立ちましたが、教える時には座っていました。

この教えの初めの部分では、イエスはその教えの対象となる人たちのことを説明しています。と言うのも、彼は神の子どもと説明しているからです。後でイエスは「それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです」(マタイ 5:45)と言われ、「あなたがたの父」について語られます。

ともかく、ここにその説明があり、それは八福の教え、あるいは至福の教えとして知られる形になっています。

「幸いな」という言葉は文字通り「ああ、何とも幸せな」という意味です。それが「幸いな」という言葉の文字通りの意味ですから、「心の貧しい人は、何とも幸せです」と言うのは矛盾しているように思えます。

どういうわけか、私たちは心の貧しい人たちのことを大変幸せな人たちとして考えることがあります。ところがイエスは、神の子どもの描写の初めに、こう告げられます。

**心の貧しい者は幸い(何とも幸せ)です。(5:3)**

注意してもらいたいのですが、近代、これを次のように翻訳しようとする、と言うよりも、もっと適切に言えば、解釈しようとする人たちがいました。それは翻訳ではなく、解釈だからです。「貧しい者は心が恵まれている」と。しかし、それは必ずしも真実ではありません。

私はとても苦い心を持った貧しい人たちを多く知っています。貧困は、必ずしも幸いな、あるいは心の満足した人を生み出すものではありません。

### **[イエスは言われました。]心の貧しい者は幸いです。(5:3)**

まず第一に、イエスは物理的な貧しさのことを語っているのではなく、心の貧しいことを言っておられます。これは高慢であることの反対です。そして人は常に、個人的に本当に神と向き合ったら、必然的にそうならざるをえません。

あなたが人生の中で神と本当に向き合ったら、直ちに、その結果として、必ず心が貧しくなるものです。高慢で傲慢な人がいたら、その人は、まだ本当に神と出会ってはいません。

イザヤ書第6章で、評判の良かったウジヤ王が死に、この偉大で評判の高かった君主がイスラエルの王座から消えた時、イザヤはこう書いています。「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、…そこで、私は言った。『ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。』」(イザヤ書 6:1,5)

本当に神を見た人は必ずそうなります。「ああ。私は、もうだめだ。」

ダニエルは、主を見た時に言いました。「私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。」(ダニエル 10:8)

ペテロが主との直面を経験した時、彼は言いました。「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」(ルカ 5:8)。本当に神を見る人は、自分自身の本当の姿を見ます。

イエスは、私たちが誤りを犯すのは、しょっちゅう自分を周りの人たちと比べているからだと言われました。私もあなたを見ると、自分はそんなに悪くないと思えます。あなたの欠点や過ちを見ると、「俺はそんなに悪くないぞ。彼らを見てみろ」と思うんです。

しかし、私が主を見て、その純粋さ、その聖さ、その正しさを見ると、「ああ、神よ。助けてください。私はもうだめだ」となるのです。

それが心の貧しさというものです。それは真の自己評価で、人間の観点からでなく、神の観点からの評価であり、私は、自分に関する真実を見て、「ああ、神よ。お助けください」と言わされるのです。

私には助けが必要です。パウロが言ったのと同じことです。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」(ローマ 7:24)

というわけで、いつもそこから始まります。神と本当の関係を持つ人が、最初に持つ意識です。しかし、イエスは、その人こそ真に幸せだと言われました。

なぜでしょう。なぜなら、その人は神と本当に出会ったからです。そして、その結果として、天の御国がその人のものだからです。彼は、もはや、この一時的な、物質的な領域に生きているのではなく、今や、神の子として、永遠の御国の市民として、御国に移し入れられているのです。

### **悲しむ者は幸いです。(5:4)**

これこそ、さらに矛盾していると思いませんか。悲しむ者は幸せである。

しかし、神の観点から見た本当の自己認識に至り、心の貧しさに到達すると、私は自らの状態に心が引き裂かれます。私は自分の失敗を嘆き、自分がどういうものであるのか、自分の中にどういうものがあるのかを見て嘆きます。しかし、主はこう約束しておられます。

### **その人は慰められるからです。(5:4)**

主が私に働き始められると、聖霊の力と強さによって、私は、自分の人生においてイエス・キリストの勝利を体験し始め、そのことは確かに、私を幸せにしてくれます。

しかし、それは私が自分自身に見切りをつけるまでは、起こりません。私が、自分には全く力がなく、能力も、権威も全くないという事実をただ嘆くところに行き当たるまでは。

私はその無力さを感じ、その無力さの中から叫ぶと、神の輝かしい力が、私の人生の中で、私が自分では決してできなかったことをしてくださるのを体験し始めます。そしてそれが、私を正当な自己評価へと導いてくれます。

### **柔和な者は幸いです。 (5:5)**

それは真の自分自身を見ることです。私はもはや、うぬぼれてはおらず、自己について自分で自分を欺いてはいません。それはやっと思いやすいことなのです。

柔和であるというのは、主の観点から自分を見て、自分は何者でもないと感じることです。

面白いことに、これらの性質は、世からあまり称賛されるものではありません。世は、積極的な人を称賛します。

いいですか。もしも、これが人間によって書かれているのだったら、「幸い」は、全く異なる種類の人間の特質に与えられていたでしょう。

しかし、イエスは神の子どものことを描写しているので、描写されているのは、天の基準で称賛に値する性質になっています。

### **柔和な者：その人は地を相続するからです。 (5:5)**

この地は神がお造りになった地ではありません。この地は、神に対する反逆によって損なわれてしまっています。でも、神は、この地をご自身が元来意図された状態に回復されるのです。

戦争は止み、人は義と、真の公正と、平安のもとに、共に住まうことになります。神の御国が地に到来し、神の子どもたちが地を相続するのです。

イエスは言われました。「**そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』**」 (マタイ 25:34)

黙示録には、キリストの体に関して、こう書かれています。「**彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。**」 (黙示録 20:4,6)

柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。 (5:5)

人間がもたらした公害がなければ、また戦争がなければ、憎しみや貪欲がなければ、この地はなんと素晴らしい場所となりえることでしょう。でも、私たちは、神が意図された通りの地球を見ることになります。神が意図された通りの地を、私たちは相続するのです。

これまでは、だいたい、消極的な性質と呼ばれるものです。八福の教えの4番目は、ある意味で、基準になるもの、中心的なものです。

自分自身を神の観点から見て、自分自身の弱さについて真理を認識し、自分を正しく評価すると、私は義に飢え渴き始めます。

使徒パウロが「私は理想を見ました」と述べているようにです。ローマ人への手紙7章です。「私は律法が良いものであることを認めます。しかし、それをどうやって実行するのか、見つけることができません。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっているからです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ 7:16, 18-19, 24）

そしてそこにこそ、「ああ神よ。助けてください」という叫びがあるのです。私はその理想的なものに飢え渴いています。私はそれを手にすることができていません。その理想的なものにたどり着くのを誰が手伝ってくれるでしょう。

イエスは言われました。

**義（理想的なもの）に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。（5:6）**

あなたが義に飢え渴いていれば、神はあなたの心にあるその飢え渴きに確かに答えてくださり、あなたは神の義で満たされます。

ここから、もっと積極的な特質に入っていきます。

**あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。（5:7）**

イエスは、私たちが非常に多くを赦されているという事実が、私たちの赦す動機であるはずだと告げられます。私たちは神のあわれみを受けたのですから、確かに私たちもまたあわれみ深くなるべきです。しかし、ここでイエスはそれを裏返して言うておられます。

「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。」ともかく、私たちはあわれみを受けています。それこそが、わたしたちをあわれみ深くするのです。

**心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。（5:8-9）**

基本的に、神の子どもの描写は、ここで終わります。この次に挙げられる至福では、イエスは、このような人に対する世の応答や反応を告げられます。

これらの特質を読むと、「ああ、そんな人はどこに行ってもみんなから好かれるはずだ」と思われるでしょう。確かに、教会内では皆に好かれるでしょうが、外の世界に出ると、話は別です。

イエスは言われました。「人々があなたを憎んでも驚いてはいけません。彼らはわたしを憎んだのです。彼らがあなたを受け入れなくても驚いてはいけません。彼らはわたしを受け入れなかったのです。」（ヨハネ 15:18）

これらの特質の一つ一つはすべて、確実にイエス・キリストの生涯において現されていました。それでも、世はイエスを十字架にかけました。そしてイエスは、そのような人に対して、世はこのように反応すると言われたのです。

そこでイエスは言われました。

**義のために迫害されている者は幸いです。（5:10）**

もしも、あなたがこういった正しい人間であれば、あなたはそのために迫害を受けます。人々はあなたを利用するでしょう。

人々はしたい放題にあなたに付け入って、あなたのことを腹立たしく思うでしょう。あなたがいると、彼らは居心地が悪くなるからです。それは、彼らが間違ったことをしたいのに、あなたが正しいことをしているからです。それで、彼らは自分たちの罪悪感をあなたに投影し始めるのです。

ここで、イエスは、「奇妙なことをしているために、人々から罵られたり、迫害を受けたり、ありとあらゆる悪口を言われる時、あなたがたは幸いです」とは、言われなかったことに注意してください。

残念ながら、クリスチャンを名乗って、キリスト教の名のもとに、奇妙なことをする人たちがいます。そして、彼らは奇妙なことをしているせいで、ある程度の迫害にあいます。

私はロサンゼルスで聖書学校に通っていた時、ダウンタウンにあるタイトル保険信託会社(The Title Insurance and Trust Company)で仕事をしていて、夕方になるとバスを使ってアパートに戻らなければなりませんでした。

聖書学校のクラスには、一人、私にとって大きな悩みの種である女性がいました。彼女はものすごく声が大きくて、一風変わっていました。黒っぽい綿のストッキングに、丈の長いスカートををはいて、髪は真っ直ぐにひつつめてあり、化粧もしないタイプです。彼女はオペラで歌っていたことがあって、オペラ向きの声をしていました。

彼女は騒々しい人でした。彼女には節度というものがありませんでした。笑う時は、誰よりも大声で笑いましたし、喋るときも、誰よりも大きな声で喋り、私に言わせれば、とにかく純粹に不快な人物でした。

どうやら、彼女もロサンゼルスで働いていたようで、時折、私の後でバスに乗って来ていました。彼女はバスに乗って来ると振り向いて、私を見つけるんです。

そして、あの大きなオペラっぽい声で言うんです。「兄弟よ、主を褒めたたえん。」変な恰好をした女の子が、誰に呼び掛けているのか見ようとして、みんなが振り返ります。それで私も「え？え？」と言って、キョロキョロと周りの人に目を向けるんです。ちょっと悲しいですね。

彼女が私に恥ずかしい思いをさせるので、私は彼女のところに行って、彼女がバスや教室で大声で呼びかけてくるのは有り難くないんだと言いました。彼女は教室でもすごくやかましかったからです。

私は彼女に次の聖句を示しました。「**教会では、妻(女)たちは黙っていなさい。**」(1コリント 14:34)すると、彼女は「主よ。迫害を感謝します」と言って立ち去りました。

さて、主は、「変わり者であるために迫害される時あなたがたは幸いです」とは言っておられません。そうではなく、「義のため、また主の御名のために」と言っておられます。

ですから、迫害が来たら、あなたが迫害されているのは、イエス・キリストのためであって、ただ風変わりな性格のためではないようにしてください。

それからイエスは言われました。

### **喜びなさい。(5:12)**

それは、イエス・キリストのためにののしられたり、迫害されている時には難しいことです。喜ぶというのは、ひどく難しいものです。

事実、塞ぎこんでしまうのが、自然です。「主よ、じゃあ、いいですよ。あなたが人々に私に対してそんな仕打ちをさせるなら、もう何にも言わないことにします。」そして、何となくすねてしまうんです。私たちはこのしられるのが好きではありませんから。私たちは迫害されるのが好きではありません。でも、イエスは言われました。「喜びなさい。」あなたにはそれができますか？

使徒の働きで、ペテロとヨハネは宮に入っていくとした時に、イエス・キリストの信仰によって足のきかない男性に癒しをもたらしました。その結果、彼らは捕らえられ、尋問にかけられました。ペテロとヨハネを尋問していた人たちは、彼らをむちで打ち、今後イエス・キリストの名によって語ってはならないと警告しました。

そしてこう書かれています。「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。」（使徒 5:41）

これは、この聖句が弟子たちの人生において実現された、典型的な例です。

**喜びなさい。喜びおどきなさい。（5:12）**

なぜか？さあ、まず第一の理由です。

**天においてあなたがたの報いは大きいからだ。（5:12）**

二つ目には、あなたには良い仲間がいるからです。

**あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。（5:12）**

ステパノが議会の前に立っていた時に、「あなたがた（の先祖）が迫害しなかった預言者がどれかあったでしょうか」（使徒 7:52）と言った通りです。

あなたがたは、私たちの先祖はこうだった、私たちの先祖はああだったと、あなたがたの先祖がいかに偉大であったことを語りますが、あなたがたの先祖は、神が彼らに送られた預言者たちを殺しました。実際、彼らが殺さなかった預言者がいましたか？

そしてあなたがたは、あなたがたの先祖よりもさらにひどいのです。あなたがたは、預言者たちが皆「来られる」と告げていたお方を殺したからです。

ステパノは、神の預言者たちが現実には受け入れられなかったことを指摘します。ですから、喜んで、喜び踊るのです。あなたには良い仲間がいるのですから。

彼らは、それらの真の神の預言者たちを全員迫害しました。偽預言者たちとは言う、まあ、彼らは高く持ち上げられて、歓迎されました。

何とまあ、彼らは快適で良い暮らしをしていました。でも本当の神の預言者たちは、大変な困難に直面しました。人々は神の真理を聞きたがらないからです。

彼らはむしろ、偽の安心感を持たせられるのを好みます。「ああ、何も問題はありませんよ。神は皆さん全員が裕福になるのを望んでおられます。神は皆さん全員がベンツに乗るのを望んでおられます。」

そんな教えを嫌がる人がいると思いますか。いいですねえ。万歳、万歳。急いでベンツを注文しよう。しかし、真の神の預言者たちは、そのような人気のある立場にはありません。

イエスは次に、神の子どもが地で与える影響について告げられます。

**あなたがたは、地の塩です。（5:13）**

当時は、塩は基本的に保存料として用いられていました。真空パック技術も冷蔵技術もなかったからです。

肉を解体すると、すぐに焼かれなかった部分は、十分に塩漬けにされなければなりませんでした。塩は肉の表面の細菌を殺し、保存効果を持っていました。肉がダメになったり腐敗したりするのを防いでいました。

イエスはご自分の弟子たちに、「あなたがたは、あなたがたが生きている世界で保存料的な影響を果たしている。あなたがたは保存料として働くのだ」と言っておられます。

皆さんは、地の塩、その保存効果を持つものなんです。確かに、本物のキリスト教は、行く先々で、その社会における保存効果を発揮してきました。

キリスト教が重要視されて、キリスト教徒の発言権が大きい所ではどこでも、その社会は守られ、維持されています。しかし、キリスト教徒の声が弱まり始めると必ず、その社会は退廃し始め、最終的には破壊されてしまいます。

歴史を見て、キリスト教の保存効果に目を留めてみれば、それが地域において強く活力のある影響を維持している限り、その共同体は強く、力がありません。

アメリカ合衆国を見てください。私たちはキリスト教の原理を基に結成されました。この国の形成には、途方もなく大きなキリスト教の影響があり、そのために、私たちの憲法には宗教の自由、礼拝と集会の自由を守る保護条項が盛り込まれているわけです。キリスト教の影響力が強く、私たちは「神の下の一国家」と口にするのを恐れていなかったからです。

けれども、年月を経て、キリスト教徒の声が私たちの社会に持つ影響力は弱められてきました。子どもたちが性目的で利用されているのを目にし、児童ポルノが制作されて購買されているのを見ると、腐敗の勢力が私たち民主主義の基盤そのものを損ない始めているのが見えてきます。

このポルノというのには、興味深いことがあるんです。他にも多くのひどいことが起こっているんですが、そのことを、皆さんも知っているべきです。

私たちの教会には、ロサンゼルス警察の児童搾取部のトップに立つ男性がいて、彼が私に個人的に教えてくれたのですが、写真を撮ったり、それらのものを発行したりしている、そういった児童ポルノの場所を強制捜査することがあって、そういう場所に手入れを行うと、いつも決まって悪魔崇拝に関する文書や、悪魔崇拝的な側面がふんだんに見つかるそうです。

彼は、それはまた殺人事件にも当てはまることだと言いました。凶暴な殺人事件では、しばしば、悪魔崇拝に関わる文書や、悪魔崇拝の証拠が発見されるそうです。彼は言いました。「チャックさん、私たちが闘っているのは、霊の戦いなんです。」

それは、ただ人間が倒錯した考え方にふけてしまったというのではなく、その根源には、悪魔崇拝があるのです。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、（この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊）に対するものです。」（エペソ 6:12）

そのことに気がつかなければ、私たちには、戦いのための適切な装備ができていないことになります。私たちは、霊の戦いを肉の武器で戦おうとする誤りを犯すことになります。それは下院議員に手紙を書いたり、そういった類のことです。

私たちがしなければならないのは、神の御前にひざまずき、祈って神の御力を求め、霊的復興を求めることです。それが、この国を再び正しい方向に向けてくれるものです。私たちが置かれているのは、とてつもなく激しい霊の戦いであり、私たちが戦っている相手は、現実には、本質として悪魔的な力であるからです。

そして私たちの戦いの武器は、肉のものではありません、霊的なもので、神によって力強く、敵の要塞を破壊するほどです。それは祈りであり、私たちは、もっと、もっと、もっと祈っている必要があります。

あなたは地の塩なんです。あなたが保存効力を持つものなのです。しかし、塩がその塩気を失ってしまっ、もはやその役目を果たしていないなら、それは何の役にも立ちません。

教会がその地域の中で浄化作用を果たしていないなら、それは何の役にも立ちません。社交施設として存在していこうとする教会は、何の役にも立ちません。

教会は、その地域内で霊的影響力として力強く機能していなければならない、その地域内にみこころになった霊的影響をもたらすことを求めているなければなりません。

**もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(5:13)**

塩が古くなって使えなくなると、それは歩道に投げ捨てられていました。雨で溶解された塩の塩化ナトリウムによって植物を枯らし、歩道に雑草や草が生えて来ないようにするためです。それで、塩は「人々に踏みつけられ」たのです。

イエスは、言っておられます。「いいですか。教会は地の塩であるべきです。地の塩となっていないなら、それは何の役にも立たず、墮落した人に踏みつけられるのです。」

イエスが「あなたがたは、地の塩です」と言われたのは、ただ課題を与えられているのではなく、教会に対する最後通告を与えられているのです。あなたがたは、神が意図された通りのものとなるか、そうならないかのどちらかです。あなたがたは「人々に踏みつけられる」のです。

それからイエスは言われました。

**あなたがたは、世界の光です。(5:14)**

ここにペテロとヨハネとヤコブという、三人の弟子たちがいます。彼らは漁師でした。彼らにはこれと言って仰々しい経歴もありませんでした。イエスは、ガリラヤにあるその場所に座っておられます。そこは大都市ローマから遠く離れています。

ローマの権力や、アテネを中心としたギリシャ文化などのすべてから離れた、そこ、ガリラヤ湖の上に位置する丘の上で、しかもこのような寄せ集めの一団に、イエスは言われます。「よいか、あなたがたは世界の光なのだ。」

素晴らしいですね。最高です。ああ、今日のこの暗い世界に教会が与えているべき影響とは… みなさんが唯一の光、みなさんが唯一の希望なんです。

パウロは、アグリッパの前で自らの任務を説明し、ダマスコへ向かう途上で起こった回心について語る際、暗やみの力から異邦人たちを救い出し、彼らを光の国に導き入れるべく、主から召命されたのだと宣言します。

ですから、それが常に教会の使命であるわけなんです。彼らが罪の赦しを受け取り、聖別された相続分を受け取れるように、彼らの目を開き、彼らを暗やみから光に、サタンの支配から神へと向かわせることです。

教会の使命は、彼らを暗やみから光へと向かわせることです。「あなたがたは、世界の光です。」

恐らく、そこガリラヤ地方の丘にあるツファットを指して、イエスは言われました。

**山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。(5:14-15)**

主を受け入れたばかりの若い少年が、宗教的な基盤のない夏季合宿に参加しようとしていました。彼はそのことを牧師に話しに行き、二人は、彼が他の子たちと一緒にその合宿に参加している間、彼の生き方がイエスのために本当に力強いものであるようにと、一緒に祈りました。

合宿から帰ってきた彼に、牧師は尋ねました。「さて、ジョニー。どうだったかい？」ジョニーは、うまくいったよと言いました。

牧師が「ああ、それは良かった」と言うと、ジョニーも言いました。「うん。誰にも見つからなかったよ。」

ですが、主は言われました。あなたがたはあかりをつけて柵の下には置きません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。

あかりの唯一の目的は、照らすことです。したがって、神があなたに持っている唯一の目的は、あなたが暗やみの世界を照らすことです。

あなたには、その光を輝かせる方法がたくさんあります。しかし、あなたは次のようにその光を輝かせなければなりません。

**このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(5:16)**

光の輝かせ方によっては、人々がその良い行ないを見て、その人を称賛することもあります。「まあ、あの方は素晴らしいですよ。あら、あれをご覧になりましたか。もう素晴らしいと思いませんか。あの方が何をされたか、お聞きになりましたか。」

私たちが自分に注目を集め、自分に栄光をもたらすために、人々の前で良い行ないをするやり方があるんです。

そして私たちの肉には、注目と栄誉を自分のものにしたいという、非常によこしまなところがあります。ご存知のように、一人ぼっちで、他の誰にも知られないよりも、大勢の人々の前で英雄になる方がずっと容易なんです。

皆が見ているところで、高潔な良い行ないをするのは、とても簡単です。まあ、彼の行ないを見ましたか。わあ、素晴らしいじゃないですか。けれど、誰にも見られていなくて、あなたの行ないが誰にも知られていない時には、話は異なります。

何年も前に私たちがハンティントンビーチに住んでいた時ですが、私たちはエジソン発電所の真向かいに住んでいて、そこにはエジソンに様々な修理をしに来る人たちがいました。そしてもちろん、霧が深く、車のライトを点ける朝がよくありました。それは自分が見るためではなく、他の人たちに自分の車が見えるようにするためでした。

そういう状況で運転している時は、ライトを点けていたことを忘れて、ライトを点けたまま車を置いていってしまうことがよくあります。それで、そういう霧の深い朝には、私はエジソン発電所に行って、それらの車のライトを消して回ったものでした。

その人たちが夕方に戻って来たら、バッテリーが上がってしまっていて面倒なことになるだろうと思ったからです。それで私はそれらの車のライトを全部消して回っていました。

でも、私はいつも、私がどんなに親切な人間なのか、彼らが知らないというのは寂しいことだと思いました。「彼らは戻って来たら、車を始動させて走り去るんだ。私が親切で善良でなかったなら、バッテリーが上がってしまっていたらどうかとは、まず気づくことはないだろう。」

私は誘惑にかられて、もう少しで短いメモを書くところでした。「今朝あなたはライトを消し忘れていて、今夜はバッテリーが上がっているところでしたよ。でも、私があなたのためにライトを消しておきました。私は通りを挟んだ向かい側に住む者です。」

どうにかして、私たちは自分の善行を人に認めてもらいたいものです。しかし、イエスは言われました。「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」

さて、私たちは福音書を読み進みながら、イエス・キリストの公生涯について学んでいきますが、私たちは、群衆がイエスのもとに来て、イエスが彼らに触れて彼らを癒されると、「彼らは神をあがめながら帰って行った」と書かれているのを、しばしば読むことになります。

分かりますか。イエスはご自分の行った良い行いを人々が目にした際に、神があがめられるようなやり方でそれをなさいました。ですから、クリスチャン生活というのは、微妙なバランスを必要とします。

あなたがたは世界の光ですが、人々があなたの良い行いを見る時にあなたのことを褒めたたえ、称賛したりすることなく、天におられるあなたの御父を褒めたたえ、崇めるように、あなたの光を輝かせなければならないのです。

それからイエスは、山上の垂訓における次の部分へと移って行き、弟子たちに、クリスチャンの律法との関わりについて語られました。イエスはこう告げられます。

**わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。(5:17)**

さて、律法は違反に対して死を要求します。イエスは、私たちの不従順のために死ぬことによって、律法を成就するために来られました。イエスが来られたのは、イザヤが「私たちはみな、羊のようにさまよひ、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」(イザヤ 53:6) と言ったように、預言者によって語られたことを成就するためでした。

イエスが来られたのは、律法や預言者を成就するためでした。「わたしが来たのはそれを廃棄するためではない。それを成就するために来たのです。」

だから、使徒パウロは、「律法が目指すものはキリストです、信じる人はみな義と認められるのです」(ローマ 10:4) と書いたのです(注:一部、新改訳2017から)。なぜなら、キリストは私たちが神との新しい関係に導き入れてくださったからです。それは、私たちが神との正しい関係を持つ基盤として、イエス・キリストへの私たちの信仰を含むものです。イエスが律法を成就されたからです。

イエスが来られたのは、それを終わらせるためではなく、それを成就するためでした。そしてイエスは、私たちの代わりに死んでくださり、私たちのために律法の必要条件を満たしてくださいました。

**まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。(5:18)**

一点一画というのは、ヘブル文字だけにある細かな句読点などのことで、母音の発音を示す、それらのごく小さな符号のことです。

「一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」

**〔イエスは言われました。〕だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。(5:19)**

ある日、イエスは、「一番大切な戒めは何ですか」という問いを受けられました。イエスは、正しく答えられました。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」

イエスは付け加えて言われました。「『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」そしてイエスは言われました。「律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」(マタイ 22:36-40)

これは要約であり、律法や預言のすべてを非常に手短かにまとめたものです。心を尽くして神を愛しなさい。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。

使徒パウロは、「愛は律法を全うします。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです」(ローマ 13:8)と言いました。

律法は否定文で与えられました。「汝、するべからず。汝、するべからず。汝、するべからず。」イエスはそれを肯定文に転換されました。「主なる神を愛せよ。己れを愛するがごとく汝の隣人を愛せよ」と。そこに、成就があるのです。

**だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、(これを破ったり、)また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。(5:19)**

しかし、その後でイエスが言われたことは、彼らをものすごく驚かせたに違いありません。イエスはこう言われたからです。

**まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものではないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。(5:20)**

これはイエスの弟子たちにとって、とてつもない衝撃であったに違いありません。なぜなら、彼らにしてみれば、律法学者たちやパリサイ人たちほど正しい人たちはいなかったからです。その人たちの人生は、それ一筋だったのですから。

そしてこの人たちは、身に着けた衣の種類や、衣服の縁の種類などによって、また、その振る舞いによって、自分たちがいかに正しい者であるかを常に見せつけていました。彼らには、祈りの最中にするちょっとした特別なしぐさがあって、そういったものが、彼らの義が並外れたものであったことを、まざまざと示していました。

イエスが「あなたがたは、ぶよはこして除く」（マタイ 23:24）と言われたのは、この人たちのことです。彼らはどうしてぶよをこしたりするのでしょうか。それは律法が、血のついたままで何も食べてはならないとしていたからです。

それで、パリサイ人が隅の方で喉に指を突っ込んで、オエッとしたり、力んだり、息んだりして、嘔吐しようとしているのが見かけられたりすることになります。

あなたが「どうしたんですか」と聞くと、「ああ、走っていたら、このぶよが口の中に飛び込んできたんだ」と返ってきます。彼は、ぶよを取り除こうと懸命でした。もちろん、それはしっかりと血抜きが終わってコーシャーになったものではない肉を食べたくなかったからでした。

そして今、イエスは、天の御国に入ろうとするなら、あなたがたの義はこの人たちの義よりもまさらなければならないと言っておられるのです。でも、この人たちは常に、律法の義の基準によって義を実践していたのです。

それからイエスは続けて、それがどういう意味かを説明されます。イエスは彼らに次のように教えられます。

**昔の人々に、（『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と）言われたのを、あなたがたは聞いています。（5:21）**

それと言うのも、弟子たちにはヘブル語が読めませんでしたから、彼らは律法学者たちやパリサイ人たちの教えによって、律法が何と唱えているかを知っているだけでした。一般の人たちは、ヘブル語を知らなかったんです。

バビロンから帰還して来た時、彼らはカルデア語を話していました。キリストの時代の共通語はアラム語で、ギリシャ語も話されていましたが、ヘブル語は学者専用の言語でした。したがって、彼らは自分の言語で実際に聖書を読むことができませんでした。

それで彼らは律法学者やパリサイ人の教えに頼らねばならず、故に「昔の人々に言われたのをあなたがたは聞いています」（5:21）となったわけです。

イエスはここで、律法学者やパリサイ人たちが律法に関する解釈をして、人々に教えていた教えのうち、五つを取り上げられます。

イエスは、まず、彼らがそれをどのように教えているかを示し、それから、神がそれを与えられた時の意図はどういうものだったかを告げられます。彼らが教えていたことと、神がもともと意図されたこととの間にある違いは、基本的に、彼らがそれを単純に物理的に実現されるべき物理的なものとして教えていたことです。

イエスは、神がそれを霊的なものとして、人の心の姿勢を律するものとして意図され、神は、あなたの行動よりもあなたの態度の方に関心を持っておられると告げておられます。

行動面においては非常に気をつけているけれども、態度のひどい人たちが今日も大勢います。神の関心は、行動の源となる態度にあります。

ですから、ある行いが、それをしている人の態度によって、すっかり無効となってしまうことがあり得るのです。教会の内外で非常に多くの素晴らしい働きをして、忙しく動き、神のためにあらゆる類の驚くべき働きをしている人がいても、その態度が良くないことがあります。

すると、神は、その人の態度のために、その人物の行いを完全に無視されます。神はあなたの人生において、外から見える行動よりも、あなたの心の姿勢の方に、はるかにずっと関心を持っておられるのです。

神が人の姿勢に語りかけようと意図されたのに、彼らは律法を人の行動を支配するものとして解釈してきました。そのため、彼らの律法の解釈の仕方で行くと、彼らにはそれを成就することができていました。

けれども、もともと意図された律法のあり方で行くと、そうは行きません。それは人の霊を律する目的がありました。律法は、実際に、全世界を神の御前に罪ある者とし、人の罪を示すことを目的としていました。

しかし、律法を読んで神の御前に罪の意識を持ち、神のあわれみと恵みを求めるよりも、むしろ、彼らは自分たちが律法の要求を満たしたかのように律法を解釈し、そのため非常に思いあがって、独善的で、他の人たちに非常に批判的になっていました。

彼らは律法をそのように解釈していたために、独り善がりプライドの高い、高慢な態度で、他の人たちをみな見下していました。

そして、それはイエスが言われた通り、パリサイ人が宮に入って行って「神よ。私は他の人のようでないことを感謝します。私は断食し、祈りますから」と言った際に顕著になっていました。彼は、自分の良いところを全部神に申し述べています。

そしてイエスはこう言われました。ある罪人が宮に入って行きましたが、彼は目を天に向けようともせず、うつむいて、ただ胸を叩いて言いました。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」  
(ルカ 18:11-13)

イエスは、この人が赦され、義と認められて家に帰ったと言われました。一方で、初めの男の祈りは、神にとって何の意味もないものでした。それは、彼らが律法を誤って、人の外面上の行為だけを律し、人の霊（心）を扱うものではないと解釈していたためです。

そして、見てのとおり、イエスは比較するとき、先ず彼らがそれをどのように教えていたかを私たちに示し、それから律法の元来の目的を示されます。それゆえ、私たちは律法の元来の目的を理解すると、神の御前に皆、罪ある者とされるのです。

まず第一に、

**昔の人々に、『(人を)殺してはならない。…』と言われたのを、あなたがたは聞いています。**  
(5:21)

実際に、文字通り、「人を殺してはならない」です。

**人を殺す者はさばきを受けなければならない。**

(5:21)

律法にはそう書かれていませんか。そうです。人を殺してはならない。それが戒めです。では、どうしてイエスはそれを議論されるのでしょうか。

その戒めを与えられた時に、神が何を意図しておられたか、お分かりですか。人を殺してはならないという戒めの違反となるのがどんなことか、知っていますか。

相手の意識がなくなるまでこん棒でだれかの頭を殴ることだけではありません。呼吸ができなくなるまで首を絞めることだけではありません。相手の心臓に剣を突き刺すことだけではありません。イエスはこう言われました。

**しかし、わたしはあなたがたに言います。(5:22)**

**あなたがたは彼らからこのように教えられてきましたが、わたしはこのように言います。これがその戒めのもともとの意味です。**

**兄弟に向かって(理由もなく)腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。(5:22)**

いいですか。殺人を引き起こすのは、制御のきかない、理不尽な怒りなのです。あなたにも、抑えきれない、不合理な怒りがあるかもしれません。そして、それを何とか抑制してきたけれど、常に腹の虫がおさまらず、内側ではいつも怒って、煮えくり返ったまま、生活しているということがあるかもしれません。

イエスは、「ほら、あなたはもう心の中で、あなたの霊において、その戒めを破っているのだ」と言われました。

でも、あなたは、銃で誰かの頭を撃ち抜いたことがないからと言って、「さあ、いいかい。俺は人殺しをしたことはないよ。だから、俺はなかなか正しい人間だと思うよ」と言います。それでいて、あなたの内側には、このひどい怒りが煮えたぎっているかもしれません。

**兄弟に向かって『能なし。(ラカ)』と言うような者は、(5:22)**

ラカとは、能なしです。

**最高議会上に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。(5:22-24)**

さて、私は幾何学で、二つの点を結ぶ最短距離は直線であることを学びました。そして、それは幾何学上では真理であるかもしれませんが、神のもとへ行く場合には必ずしもそうとは限りません。

私たちが祭壇に供えものを携えて神に近づこうとする際、最も直接的な方法は、直線ではなく、気分を害している兄弟を介するものであることが多々あります。「まず最初に出て行って、あなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから来て、その供え物をささげなさい。」

イエスは言われました。

**あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に [ためらうことなく] 早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることとなります。まことに、あなたに告げます。あなたは最後の一コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。(5:25-26)**

もちろん、イエスは債務者刑務所などもろもろのことを指して言うておられます。ですから、人と仲良くしてください。人を愛してください。

**『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。(5:27-28)**

最初の部分では、皆さんの多くが、自分は正しいと思って、堂々と座って、「ああ。私は姦淫を犯したことはありません」とおっしゃるでしょう。でも、イエスがそれを、神が意図された通りに、「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」と説明されると、突然小さくなって、言葉を失ってしまいます。あの欲望は、主の目には罪とされるのです。

イエスがそれを解説されている場合の違いは、それが私たち全員を神の御前に罪ある者とするものでした。一方、彼らの解釈の仕方は、彼らを非常に尊大で独善的にするものでした。

しかし、イエスの解釈の仕方では、私たち皆が罪人とされました。そして、律法には、まさにそういう目的がありました。神の御前に全世界を罪あるものとするのです。

それは、私たちが自分自身の義において神の御前に来ようとしなないためです。そうではなく、私たちが、私たちのために神が備えてくださった義を求めるためであり、私たちがイエス・キリストの義によって、神の御前に義とされるためです。ですから、律法は、私たちがイエス・キリストのもとへと駆り立てる養育係でした。

イエスは言われました。

**もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。(5:29-30)**

ここで一つ言わせてもらいます。山上の垂訓や、イエス・キリストのみ言葉を解釈する時、私たちは気をつけなければなりません。なぜなら、もしも私たちの解釈によってその聖句が馬鹿げたものとなるなら、私たちは間違った解釈をしていることになるからです。

このことに留意すると、「もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい」というのは、文字通りに目をえぐり出して捨てることを言われているではありません。

あなたはその目で若い女性を見て「オオっ、いいな」と反応します。しかし、たとえあなたが右目をえぐり出したとしても、まだ左目が残っているからです。

あなたが泥棒やスリだとして、右利きで、右手があなたをつまづかせるなら、それを切り落としてしまいなさい。もしそれが文字通りの意味ならば、あなたは左手でその技を習得するでしょう。

ですから、イエスは文字通りにあなたの目をえぐり出したり、手を切り落としたりすることを語っておられるのではなく、ただ、私たちに示そうとしておられるのです。右目をえぐり出すなどという考えは、誰にとっても非常に不快で、とにかく嫌なものだからです。

まったく、想像すると身震いがします。オオ気色悪い。自分の右目をえぐり出すとか、自分の手を帯ノコにかけてとか、考えただけでゾッとします。ああ気持ち悪い。のこざりと一緒にテーブルの上に乗っかっている自分の手を拾ってポケットの中に突っ込むのを想像すると、ゾッとします。そんな考えは不快です。

イエスは、こうして、わざと私たちにとって非常に不快な話をするので、ただ、天の御国に入ることの重要性を示そうとしておられるのです。

現実に、私たちの誰にとっても最も大切なこと、体全体よりも大切なこと、自分の体の部位がどこも損なわれないことよりも大切なこと、それは、天の御国に入ることです。

そして私には、人生におけるそのような根本的な重点が必要なんです。天の御国は最大の目標であり、最大の望みです。そのため、それは私の人生に最大の犠牲をもたらすものであるはずでは

ありません。そして私は一時的に支払うどんな犠牲も、気にかけるべきではありません。なぜなら、私は永遠なる天の御国を求めているからです。

三つ目の比較として、イエスは言われました。

**また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』とされています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。(5:31-32)**

イエスと離婚の問題は非常に興味深い関心事であり、離婚率の高い今日では、現実の問題に直結するものです。律法の下では、男性が女性と結婚して、彼女に恥ずべきことがあるのが分かったら、彼に離婚状を書かせて彼女に与えさせなさいとありました。

その当時は、女性にはあまり権利がありませんでした。もしも彼女の夫が彼女に離婚を言い渡したければ、そうすることができましたが、彼女が夫に離婚を言い渡すことはできませんでした。

妻が夫を離婚する規定はありませんでしたが、夫には離婚をすることができました。そうして彼らは、今日と同じように、法を都合よく解釈し始めました。

ご存知のとおり、私たちの法律は、今や、法廷でますますリベラル（自由）に解釈されてきています。

ですから、例えば、警察官があなたを逮捕する時に、捜索令状を持っていませんが、あなたを捜索し、あなたが銃を所持していることを発見します。そして条痕検査によって、それがその近所で起こった殺人事件に使用された銃であることが証明されます。

そしてあなたのポケットには、その男性の腕時計やら財布やらが入っています。しかし、その警察官はあなたにあなたの権利について知らせず、あなたへの捜索令状を持っていませんでした。それであなたは無罪放免です。私たちがそのように法を解釈するからです。

実際に、私は先日、ある男が無罪放免になったのを見ました。裁判にかけられていた時に彼が囚人服を着ていたことが、彼の有罪を前提としていたからです。彼は実際に罪を犯し、それを実証するための証拠が十分にあったにも関わらずです。

その男は、陪審員の前に立った時に、ビジネススーツではなくて囚人服を着ていたという理由で、無罪放免になりました。解釈の仕方によって法が緩和されるのです。

さて、離婚に関するこの戒めは、都合よく解釈されて、極端に緩和されてしまっていました。律法では、夫は何を以て妻が恥ずべきことと判断できたでしょうか。

シャンマイの指導の下に非常に厳密に解釈していたラビの学派が一つあり、結婚の時点で妻が処女ではなかったこととしていました。

けれども、他のラビの学派はその戒めを緩和し始め、妻が朝食の卵をあなたの好きなように調理しなかったというだけで、彼女に恥ずべきことがあるとすることができるようになりました。

彼女の料理は好きじゃない。おい、お前はもういい。離婚状を書く。彼らが離婚状を書いて彼女に手渡せば、彼女には全く選択の余地がありませんでした。彼がそうしたら、彼女はいなくなったんです。彼女には頼みになるものもなく、出て行くしかありませんでした。

そのために、この、結納金という風習が民間に広まったわけです。結納金というのは、実際には離婚手当の前払いとなっていました。それは女性の父親に支払われ、父親は娘が夫に追い出された時のために、それを保管しておいたのです。それによって、離婚手当がすでに備えられていたわけです。

男性は、結婚の前にそれを支払いました。結納金というのは、現実には離婚手当の前払いでした。離婚があまりにも自由に、いとも簡単にできる場合には、それもあまり悪い話ではありません。

そういう事情が背景にあります。離婚がいとも簡単にできるのです。離婚状を書いて渡せばよいのです。どんな理由でも、どんな汚れでもいいんです。何でもありです。彼女の髪のかし方が気に入らないとか、彼女が朝起きた時の顔が好きじゃないとか、そんな風に、彼らは離婚に関する戒めをひどく緩めてしまったのです。

それで、イエスはその本来の意味に戻ろうとされています。ですが、これについては、19章でイエスの戒めと離婚について考察する際に、もっと深く掘り下げることにします。イエスはそこでそれをもう少し詳しく説明し始められるからです。

ですから、私たちは今夜はそれを全部は取り扱わず、19章に入るまで待つことにします。

さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。(5:33-37)

イエスが語っておられるのは、「はい」と言っているようでありながら「いいえ」と言うことができたり、本心で「はい」と言うつもりがないのに「はい」と言う、ずるさのことで、要するに、イエスは、信頼される人になりなさいと言っておられるのです。

あなたは誓いを立てたりしなくてもいいはずなんです。自分が真実を言っているのだと誓わなくてもいいはずなんです。「聖書に賭けて誓うよ。俺は本当のことを言ってるんだぜ。」

そうしなければいけないとすれば、それはただ、あなたが基本的に不誠実な人で、誰もあなたを信頼しないからです。

けれども、あなたは信頼される人となるべきです。「はい」と言うなら、本気で「はい」と言い、「いいえ」と言うなら、本気で「いいえ」と言うべきです。

あなたがたは、「はい。」は「はい。」、「いいえ。」は「いいえ。」とだけ言い、次のような長々とした不正直な言い方をしないようにしなさい。「いやあ、喜んでそうさせてもらいたいんだけどね。そうだ、こうしよう。」

そのことについて、祈ってみるよ。」でも、本当のところは、あなたは「いいえ」と言っているんです。「本当はやりたくない」と。そうする気は全くないけれど、相手が気分を害するかもしれないから、「いいえ」とは言いたくないんです。

しかし、イエスは信頼される人になりなさいと言われました。「はい」と言うなら、本気でそう言いなさい。「いいえ」と言うなら、本気でそう言いなさい。それ以上のことは、不正直で、真実を隠そうとするものです。

**『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。(5:38)**

彼らがこの戒めをどのように教えていたか、説明しましょう。まず初めに、この戒めは一般の民に対して与えられたものではありませんでした。

これが律法になったのは、裁き司たちのもとに持ち込まれた事例の裁きに関して、神が彼らに指示を出されていた折のことでした。裁き司は公正な裁きをするべきだと。そして、神が「目には目で、歯には歯で」と言われるのは、裁きを行う時は、その裁きを公正なものにしなければならないことを示されるためです。

判決をその犯罪に見合ったものにしなさい。犯した罪にふさわしい裁きをしなさい。目には目で、歯には歯で、としなさい。

神はただ公正な裁きについて語られているのですが、それは裁き司たちに向けられたもので、個人を対象にはいません。律法のその部分においては、神は裁き司たちに、裁きの座に着いた時にどのように裁きを行うべきかを指示されているのです。

ところが、彼らはそれを個人的に解釈し始め、(リベラルに)自由化してしまって、今やそれは、あなたにとって、目には目で、歯に歯でということになりました。

しかし、彼らは「目には目で、歯には歯で」というのが、判決として可能性のあるものと教えていただけでなく、それが義務であると言っていたのです。

今日でさえも、多くの家系に、目には目で、歯には歯でという、この無益な風習が続いています。そしてこれらの抗争は、何世代にもわたって続くんです。

彼らは我々の一族の一員を殺した。我々も彼らの一族の一員を殺そう。彼らは我々一族の一員を痛めつけたから、我々も痛めつけよう。我々にはその義務があり、面目にかけてそうしなければならない。

彼らはそれを何か面目にかけて行わなければならない、行う義務のあるものとして見ました。目に対して目を、歯に対して歯を取らないことは、名誉を損なうことでした。彼らは本当にそれを実行するんです。面目にかけてそうしなければならないのです。

しかし、イエスは、「いや、そうではありません」と言われました。まず、それには個人的な報復は含まれていません。そうではなく、それは裁き司たちが公正な裁きを行うためのものです。

イエスは言われました。

**しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。(5:39)**

さて、この「悪い者に手向かってはいけない」というのを取り上げて、警察に反対する人たちがいますが、それは愚かで馬鹿げた解釈であり、よって、正しい解釈の仕方ではありません。なぜなら、イエスは愚かで馬鹿げたことは一言も言われなかったからです。

もう一度言いますが、イエスは私たちに、自分で復讐しようとしてはならないと語っておられるのです。

**あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。(5:39-41)**

その当時は、ローマ兵たちはあなたに強制して、彼らの背のうを1マイルの距離分、運ばせることができました。ローマの法律によると、あなたが道を歩いている時に、背のうを背負ったローマ兵が来て、あなたに「これを1マイル運べ」と言うと、あなたはそれに従わなければなりませんでした。ローマの法律では、あなたはそれを1マイル運ばなければならなかったのです。

当然、ユダヤ人たちは、そのローマの支配や統治というくびきを忌み嫌っていました。彼らは反逆を口にしていました。そして、ローマ兵のために1マイル分、その荷を運ばなければならぬとなると、これはもう、彼らを何とも苦々しい思いにさせたものでした。

イエスは、「いいですか。あなたに一ミリオン（マイル）行けと強いるような者とは、二ミリオン（マイル）行きなさい」と言われました。二マイル目には、どんな証の機会が待っているか、考えてみてください。「おい、お前は変わってるな。一体どういうことなんだ。」

**求める者には与え、借りようとする者は断わらないようにしなさい。『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。(5:42-45)**

**神は、善人も悪人も皆同じように扱われます。正しい人にも正しくない人にも雨を降らせ、正しい人にも正しくない人にも太陽を上させます。神は、それらのことにおいて、不公平ではられません。**

**ですから、あなたも天におられるあなたがたの父のようにならなければなりません。あなたを呪う人を祝福し、悪意を持ってあなたを利用する人のために祈り、あなたの敵を愛するのです。「わたしは言います」とイエスは言われました。彼らはこう言うが、わたしはこう言います、と。**

さて、私が初めに指摘したように、彼らの律法の解釈の仕方では、人々は、律法を守っているからと言って、自分は正しいと感じることができました。

しかし、イエスの律法の解釈の仕方では、彼らは皆、罪ある者とされました。さあ、イエスの律法の解釈の仕方を見て、あなたは自分が正しいと思いますか。それとも自分には罪があると思いますか。

よって、律法の本当の目的は、人の心の姿勢を律することだったことが分かります。あなたの心の姿勢が神の御前に誤ったものであったら、あなたは神の御前に罪ある者となり、あなたは神の赦しと神の助けを求めているはずです。

しかし、問題は彼らが律法を解釈していたやり方にあり、律法の目的は、人の心の姿勢を律することでした。

イエスは結論として言われます。

**自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。〔そんなのは大したことではありません。〕 取税人でも、同じことをしているではありませんか。(5:46)**

あなたがただ、自分を愛してくれる人たちを愛しても、それは大したことではありません。「ああ。私はあなたたちのことが大好きです。」ご立派ですね。皆さんは私のことを愛しておられますか。では、私が皆さんを愛するのはただ自然なことです。でも、イエスは言われました。

**また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。(5:47)**

もしも、あなたが自分の知っている人たち、あなたの兄弟である人たちだけに対して好意的で親切で協調的であるとしたら、あなたのしていることと他の人たちのしていることにどんな違いがあるでしょう。あなたが自分を愛してくれる人たちだけを愛しているとしたら、あなたのしていることと他の人たちのしていることにどんな違いがあるでしょう。

ここで暗示されているのは、クリスチャンとして、あなたは他の誰よりもまさったことをしているべきで、もしも、あなたが他の誰よりもまさったことをしていないのなら、クリスチャンであることをどうして本当に誇ることができるのかということです。

問題は、あなたが、クリスチャンではない人にまさって、どんなことをしているのかということです。もしも、あなたが自分を愛してくれる人たちだけを愛するなら、あなたは他の人にまさることを何もしていません。

もしもあなたが自分に挨拶をしてくれる人たちにだけ、あるいは自分の兄弟だけに挨拶しているなら、あなたは他の人にまさることをしていません。あなたが自分の知っている人たちにだけ好意的であるとしたら、あなたは他の人にまさることをしていません。

それから大詰めに入ります。あなたがそれでもまだ罪人だと思えないならば、イエスはこう言われました。

**だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(5:48)**

というわけで、私は落第しました。うまくやり切れなかったんです。私は達成からは程遠い所にいます。だから助けが必要なんです。

ありがたいことに、神は、私のために流されたイエスの血潮による赦しによって、必要な助けを備えてくださっています。

6章と7章に進むのは、次回まで待つことにします。言うべきことがたくさんありすぎて、全然時間が足りませんから。そして、もし、その前に主が来られたら、私は部屋の反対側から皆さんに手を振りまします。私たちは主の御足のところで、もっともっと神の愛について学んでいくのですから。

というのも、神は、果てしなくとこしえに、私たちに対する神の愛と恵みのひとかたならぬ豊かさを、私たちの主キリスト・イエスにあって、示し続けてくださるからです。

私たちの主であり救い主であるイエス・キリストにあって完全にされた私たちが、皆、神の御前に立つ日は、何と輝かしいものとなることでしょうか。「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、…」それが「完全である」ということです。主はまさにそのように、あなたを御父の前に立たせてくださるのです。

素晴らしいと思いませんか。私が完全であるからでなく、私が主において完全であるからです。

聖書には、キリストにこそ神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っており、あなたがたはキリストにあって満ち満ちている（完全である）と書かれています。（コロサイ 2: 9-10）それはここで使われているのと同じギリシャ語です。「だから、あなたがたは、完全でありなさい。」同じギリシャ語です。

あなたは主において満ち満ちている、つまり完全であるのです。あなたがたを傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせるために。（ユダ 1:42）

あなたが神の御前に立つ時、主はまさにそのように、イエス・キリストにあって満ち満ちた者としてあなたを立たせてくださるのです。私たちのためにそうすることができるのは、神の恵みだけです。

お分りのように、神の律法は私たち全員を死に定めます。しかし、イエスは「わたしは律法を成就するために来た」と言われました。よって、イエスは私たちのために死んでくださったのです。いいですか。イエスはこの部分全体において、律法について語っておられます。

わたしが来たのはそれを廃棄するためではありません。わたしが来たのは律法や預言者を成就するためです。イエスは、罪ある私たちのために、ご自身の死においてそれを成してくださいました。なぜなら、律法は霊的で、私は肉的だからです。

よって、律法は私を罪に定めました。パウロは、「戒めが来たときに、罪が明らかにされ、私は死にました」と言いました。私には罪があったので、戒めは私を死に定めました。

ですから、もしもあなたが戒めを読んで、非常にうぬぼれて自分は正しいと思い、「私は他の人たちとは違う。私はそんなひどいことをしたことは一度もない」と言うならば、見直してください。

あなたの心の姿勢には何がありますか。神が見ておられるのはそれです。人はうわべを見るかもしれませんが、神はあなたの心を見ておられるからです。それが、今夜、神が関心を持っておられるものです。それは、神の御前に砕かれた心です。

自らの罪や咎を悲しむ心、神を求めて飢え渴く心です。なぜなら、それらは神のあわれみで満たされ、清くなり、神と神に関するものを純粹に求める心となるからです。主を褒めたたえましょう。

お父様。私たちは、あなたの御名のために私たちがあなたの義の道を歩むよう、人生の手引き、私たちの足のともしび、私たちの道の明かりを与えてくださったことを、ただあなたに感謝します。お父様、くり返し、今夜もここに集い、あなたのみことばをわかち合えたこの特権を、あなたに感謝します。主よ。今、私たちがここから出て行くに当たって、あなたの聖霊が私たちと共にいてくださり、私たちを見守り、私たちを保ってくださいますように。

お父様。私たちには日々、何が起こるか分かりませんが、今、中東を包み込んでいる混乱の中、爆弾や大砲やロケット弾の中で、私たちはエルサレムの平和を祈ります。

ああ神よ。あなたの御国が来て、天におけるごとくに、この地であなたのみこころがなりますように、私たちはもっと祈ります。そこではもはや、憎しみや強欲や戦によって人が人を殺したり破壊したりすることはありません。

私たちが皆、あなたの御国で、あなたが私たちに望まれる世界で、それぞれに自分のぶどうの木やいちじくの木の下に座り、平安のうちに暮らしますように。イエスの御名においてお祈りします。アーメン。

主があなたと共にいてくださり、素晴らしい一週間を与えてくださいますように。あなたが聖霊の力で満たされ、神から来る愛、それに反して積み上げられたすべての障害物や障壁を乗り越える愛にあって歩めますように。

あなたがあなたを憎む人たちを本当に愛し、悪意を持ってあなたを利用する人たちに善を施し、それによって御国の子どもとしての特質や性質を本当に示すことができますように、イエスの御名でお祈りします。